公開用

滋賀県文化審議会評価部会第７回会議　議事録概要

１　日　時　　平成 26 年 10 月 10 日（金）10:00～12:00
２　場　所　　滋賀県庁本館４Ａ会議室
３　出席者　　委員：中川委員、東委員、直田委員、殿村委員
（４名出席）
オブザーバー：山元制作統括（(公財)滋賀県文化振興事業団）
事務局：総合政策部次長、総合政策部管理監ほか

４　議　題　　（１）平成２５年度滋賀県文化振興基本方針の実績について
（２）平成２４年度の個別事業の評価にかかる改善状況および
平成２５年度の個別事業の評価にかかる実施結果について
（３）平成２６年度の個別事業の評価にかかる事業視察について
（４）評価指標の検証について

５　議事録概要　　以下のとおり

■　次長挨拶
■　議題
（１）平成２５年度滋賀県文化振興基本方針の実績について

委員　　目標未達の項目があるとはいうものの、項目９以外は大きく下回っているわけではない。まず、若者の育成支援の目標設定がこのままでよいのか、あらためて議論してみる必要がある。

委員　　若者の参加が少ない芸術文化祭については、そのあり方そのものに問題があると考えた方がよい。若者は、芸術文化祭など相手にしていない。私の推測だが、若者は、自分たちの表現が今の芸術文化祭では満たされないと感じているのだと思う。若者からヒアリングを行う等必要ではないか。

項目５の芸術鑑賞した小中学生の数は、これまでしっかりと事業に取り組んだことの反映で、成果を出している。

項目１２のボランティアの数は、数字そのものの問題ではないと思う。世代交代の問題があり、とりわけ文化は年配の方が多いので、新しい人が入って来て代謝が起こればよいのだと思う。

項目１６の芸術家の数についは、これをうまく使わない手はない。アーティストの活動を産業とうまく結び付け、彼らがメシを食っていけるようにしなければならない。

委員　　滋賀県は今注目されている。「ちはやふる」で一大ムーブメントが起こっている若者文化の集積地であると全国的に認識されているのに、滋賀で若者の文化活動への参加が少ないというのは、違和感を感じる。滋賀は全国的に話題となり、若者を吸収するようなブラックホールであるのに、芸術文化祭への参加者数だけを指標にするのは、

客観的に見ると違うのではないかと思う。

部会長　一点目は、次の方針を策定する際、民間団体が主催する公演等の後援件数は、指標の入替えをしてもよいと思う。これは間接指標でしかないので、民間団体が主催する文化芸術的な行事の数を拾う方が大切。

二点目として、国登録有形文化財の数が増えることが、はたして指標となりえるのか。文化政策の審議会なのだから、その活用や発信、観光との連動性を計る指標にしなければならない。

三点目として、減っているデータは論外だが、前年と変わらない横ばいのデータは注意が必要で、手を打つ必要もなければ　欠陥もないと思ってしまう。

手を打たなければ必ず低下し、手を打てば必ず反応が出てくる分野がある一方、蓄積させていく分野もある。単年度の達成数は横ばいでも、徐々に蓄積されて増えてくるものもある。

四点目として、次の方針作成にあたって追加すべき指標はないかと考えている。県民の文化的活力とか文化的人権保障的といった生涯学習の視点、もう一つの柱として、県の観光振興に役立つ視点、新たなチャレンジに着目して、県全体の文化的インパクトに役立つ視点に区分した方がよい。県民文化振興と産業経済活性化に分けて考え、この２つをつなぐ指標があればよいと感じている。

委員　一つの提案として、アール・ブリュットは注目されており、滋賀県が力を入れてきていることでもあるので、アール・ブリュットに取り組んでいる障害者施設の数も指標に入れてみたらよいと思う。

（２）平成２４年度の個別事業の評価にかかる改善状況および平成２５年度の個別事業の評価にかかる実施結果について

委員　びわ湖ホールのオペラといい、近代美術館の展示といい、滋賀がもっているものを活かした上で、全国に発信できるような文化が提供できているという意味では、いずれの企画も良かったと思っている。ただ、いずれの事業も集客数という面ではちょっと残念な結果だったという印象が強い。それをどのように改善していくのかを考えていかないともったいない。

委員　びわ湖ホールがコジ・ファン・トゥッテなど全国的な水準のものを上演されているということは、それだけの集客力もあるし固定客もできるかな、とは思う。

美術館の方は、どれだけ固定客を作れるかが課題。「ポップの目」も「石山寺」も、地元にあるいい資源を上手く利用している。ある意味気長にやる、ということも大事。徐々に良さを感じてもらう人が増えていくと、地元の方もちょっと行ってみようかな、となることがあると思う。

繰り返し、手を変え品を変え、発信し続けることで、少しずつ関心を持たれ、楽しまれる方が増えてくるのではないかと思う。

委員　内容的には非常に素晴らしいと思う。だが現代では、どんなに一つ一つが頑張って

「良いですよ」と言っても、情報が多すぎて分からない状態になっている。何が必要かと言えば、まとめて見るような、ナビゲーションのような第３の指標が求められる時代になっている。

簡単に言うと巡礼やスタンプラリーのようなもの。「滋賀特選文化(30) 2015」というように、この中の内容を滋賀県がまとめて保証しますよ、というようなもので、達成感を感じられるもの。そういう取り組みで、初めて人が集まるのではないか。県において一つのヒントにして欲しい。

部会長　一点目は、びわ湖ホールにしろ、長栄座にしろ、美術館にしろ、全国レベルより高い施設である。企画力もあり、事業量もある。しかしながらそういう評価が県内で定まっているのか、という不安を感じた。県の人はたいして誇りに思ってないのでは、と。

二点目は、凄くレベルの高いアートの生産人材がいるのに、それを上手く販売する人がいない。セールスできるという力が抜けている。当然、自分の所の商品を売る努力はされているかと思うが、県立美術館など、あれだけ場所が遠い所に、良いものがあるというだけで人がくるかという絶対的なハンデがある。

殿村委員のご意見でそれ、と思ったのが「コースを設定して巡礼をさせる」というもの。プロデュース・販売戦略を考える部隊が要るという気がしてならない。

三点目は消費者動向について。消費の動向について、この委員会であまり分かっていない。県民の皆さんがどういうことを求めているのか、逆に県民に何が欠けているのか。社会教育の世界でよく言う「要求課題」と「必要課題」。前者に関してはアンテナを張り何となくでも見えるとしても、後者が見えているのかどうか。

プロデュースもしくは販売という戦略を考える部隊が必要。それは、県の文化産業とか、アイデンティティを高める、プレステージを上げるという大戦略のもとになされるべき。

委員　　滋賀県を凝縮したものでＰＲしていくものをマスメディアに載せる方法、広告ではなく話題にする方法はいくらでもある。それを毎年発表していけば、いつの間にか「滋賀県に行ったらいい所がたくさんあるんだね」ということになると思う。今はそういう時代。ひとつではなく、ＡＫＢのように集団でいかないとみんな分からない。

部会長　二流であってもいいプロデュースをされて世の中に出ていれば、次第に一流になってしまうということがある。そういう時代。世間の波、評価の波に晒されて、二流、一流半が超一流に上がっていく。そういう意味でプロデュースにもっと資源を投入した方が良い。せっかく有るものを劣化させない、逃がさない。

委員　　美術館のワークショップはできるだけ申し込んだ方が全員参加してもらえるようにするとともに、学校単位・クラス単位でたまに来てもらうということがあっても良いのではないか。それがある意味で売る仕掛けの長期的な戦略の一つとして大きな意味があるのではないか。

（３）平成２６年度の個別事業の評価にかかる事業視察について

部会長　１人で３事業全てを視察するのは難しいということは了解いただいているという認識でよいですか。

事務局　委員の皆様のご負担を考えて、１事業、多くても２事業でお願いしたい。

（４）評価指標の検証について

部会長　今日の提案も含めて、事務局の方から評価指標について提案してくださるのですね。作業行程は。

事務局　評価指標については、重点施策の柱立てと密接に関係しているため、その柱が決定しないと評価指標についてもどうなるのかが決まらない部分もありますことから、本日は、従来どういうところが課題であったのかや、現在こういう点が問題点なので今後の評価指標ではこういう考え方が必要、こういう事に留意した方がよい、などのご意見を頂ければと考えております。

部会長　私の方で発言をちょっと修正したいのが、評価指標として後援件数は疑問があると申し上げましたが、「美の滋賀」づくりを実践するものに後援していく、むしろこれは望ましい話じゃないかと。「『美の滋賀』をテーマとした後援件数が増えていくこと」これについては賛成です。単なる後援件数ということに疑問があっただけで。

委員　やはり芸術文化祭への若者の参加人数が気になっている。少なくとも写真展に関しては、平成２５年度の１人という数字が示すように、今の学生を見ると、少し写真が上手な子でも、撮ったものをすぐネットにアップして「いいね」をもらうような発信・評価の方法を選んでいる。大部分の若者にとって芸術文化祭に写真を出展する必要性をどこまで感じているのか、確認した方がいいのではないか。

委員　ただ単に創作活動をした、鑑賞したというだけでなく、もう少し実態が分かるような指標設定が必要なのかなということ。また、指標があれば、その指標を通しての施策目標、実際に何をしていくか、ということがセットであると思うので、それを明確にしておくことが、目標数値以上に大事なことだと思う。

上限や目標に達したものもいくつかあり、それらは当然外すことになるのだろうと思うが、外すからといってそれをやらないという訳ではなく、目標に達したが、引き続き取り組んでいくということを示しつつ、新しい指標を設定する。

委員　今はＩＲでも実績だけでは株主が付いてこない時代。これからどうしていくかというビジョンが要る。そちらに繋がるようなヒントと言いますか、時代に乗っかってみるというようなヒントを皆さんに出すというようなこともあればいいのではないかと

思う。

指標を上げるような提案、例えばこの６月に「花き振興法」というのが出来た。これを盛り上げる取り組みには国を挙げて応援しようという動きがあり、マスコミもそれに乗ってきている。そういった動きにちょっと乗っかるような提案をプラスして、指標を上げるような努力や仕掛けを考えてみても良いのではないかと思いました。

部会長　今のお話も含めて、一貫して今日の底流にヒントとして流れたのは、「違うものと組み合わせる」ヘテロドキシーというかヘテロミックスというか、ミックス・コンプレックスというか、そういった発想を可能にするような政策を打っていかなくてはいけないということが一つ。

それから、本当に滋賀県を文化の最先端の県にするというビジョン、覚悟あるいは意気込み、みたいなものが必要ではないか。現在の方針は、「滋賀県って結構いい位置に居るし、現状でもいいんじゃないの？」というような内容で、喧嘩しようという気迫も、守り抜こうという危機感も無い。そういう腹に力が入らないようなところがある。次の方針ではこれを少しでも変えませんか。これはビジョンということです。

あと、現在基本構想を策定中とお聞きしているのですが、これが現在もしくは将来の基本方針とちゃんと連動するように作業を進めていただきたい。向こうは向こうで勝手に作ってるんです、というのはダメです。総合計画というのは計画行政の柱になるものであるし、議会に対する公約にもなるものですから。

以　上